

「俳句の小径」の服部嵐雪・飯田蛇笏・星野立子 ～一瞬を捉える感性～

校長 玉井 啓二

本校の正門のすぐ西側に位置する「俳句の小径」には、十一基の句碑が設置されています。これまでに、その内の八基の句碑について紹介してきました。今回は、残り三基の句碑の俳句を紹介します。

梅一輪一輪ほどの暖かさ 服部嵐雪

服部嵐雪(はっとりらんせつ)は、承応3年(1654年)に生まれた、江戸時代前期の俳諧師です。21歳の頃に松尾芭蕉に入門しました。芭蕉の高弟(優れた弟子)10人の中の一人と言われています。

この俳句の季語は「梅」。春の季語です。俳句の意味としては、「梅が一輪咲いている。それを見ると、一輪ほどのかすかな暖かさが感じられる。」とか「梅の花が一輪咲くごとに、少しずつ暖かくなっている。」と解釈されることがあるようです。私は、梅が一輪咲いたその一瞬に暖かさを感じたという〈一瞬の感動〉を俳句に表したと受け止めていて、前者を支持したいと思います。



をりとりてはらりとおもきすすきかな 飯田蛇笏

飯田蛇笏(いいただこつ)は、明治18年(1885年)に山梨県笛吹市で生まれました。正岡子規の影響を受け、河東碧梧桐に師事しています。蛇笏は、家を継いで農業や養蚕に従事したため、山梨県の山間部で作られた俳句が多いそうです。

この俳句の季語は「すすき」。秋の季語です。俳句の意味としては、「はらりと軽やかにすすきの穂がなびいて見えたのに、意外にも穂先から重みが伝わってきたよ。」といったところでしょう。蛇笏が故郷山梨の山間の風景に愛着を持っていたこととともに、すすきを切り取った瞬間に感じた意外な重さという〈一瞬の感動〉が表れており、その場の臨場感が感じられます。

なお、この俳句は漢字を用いることなく、すべて平仮名で表記されています。このことによって、すすき全体の柔らかさや軽やかさがよく伝わってきます。この俳句からは、俳句の効果的な表し方についても学ぶことができます。



子の摘める秋七草の茎短か 星野立子

星野立子は、明治36年(1903年)に東京で生まれました。3月3日号で紹介した高浜虚子の次女です。昭和元年(1926年)より、父である虚子に勧められて俳句を始めました。そして、昭和5年(1930年)に、初めて女性が主宰した俳誌『玉藻』を創刊しました。虚子の一族で、特に俳句の評価の高い人物と言われています。

この俳句の季語は「秋七草」で、文字どおり秋の季語です。俳句の意味としては、「子供が小さな手で摘んできた秋の草の茎がなんと短いことよ。」といったところでしょう。おそらく、子供が秋の草の小さな花を見つけ、その花を摘んで「かわいらしい花が咲いていたよ。」と母親に見せに(あるいはプレゼントしに)来たのでしょう。そして、母親である立子は、子供が美しさを感じた所を摘んだので、茎が短くなったことを直感したのでしょう。母親らしい視点からの〈一瞬の感動〉が表れています。



今回紹介した三句に共通するのは〈一瞬の感動〉です。これらの三句は、〈一瞬の感動〉を十七音に落とし込んでいることがよく分かります。さらに言えば、これらの三句からは、十七音に落とし込む前の嵐雪・蛇笏・立子の〈一瞬を捉える感性〉がいかに素晴らしいかを感じることができます。

さて、今回で「俳句の小径」に設置されている十一基の句碑に記された俳句をすべて紹介しました。これから垣生の子供たちが俳句に親しみ、垣生の文化を継承・発展させることを祈念して筆をおくことにします。

【参考】俳句の聖地「愛媛・松山」へ吟行をいざなうサイト | 五・七・五のころ旅 吟行ナビえひめ

俳句の教科書 <https://haiku-textbook.com/umeichirin/>